活動報告 CALL/ICT 部門

CALL を利用した自律型学習への展望

外国語学部英米学科　大森 裕實

平成 21 年度から高等言語教育研究所に「CALL/ICT 部門」が新設され、学部の通常委員会である「LL・情報委員会」と意思疎通を図りながら、本学の外国語教育に *C*omputer *A*ssisted *L*anguage *L*earning（以下 CALL）と *I*nformation *C*ommunication *T*echnology（以下 ICT）を活用して、学生の自律的学習がどの程度まで可能となるのか、また、そのための支援には何が必要なのかについて、実践的考察を行なう１年であった。この１年間の経験がこれからの本部門の活動を方向づけることになるであろう。なお、本年度は「CALL/ICT 部門」と「LL・情報委員会」のどちらも本報告者が代表を務めることで、これらの活動の円滑な運営が可能となり、また相乗的効果を喚起することができた。

1. CALL 教室の整備計画――本学学務課や近隣大学との連携

本学には平成 10 年度の長久手キャンパス開学移転時に設置されたアナログ式の LL 教室が 5 室（50 名収容の大 2 室と 30 名収容の小 3 室）が存在したが、PC や LL 機能の老朽化に伴ない、それを最新の PC と CALL 機能を備えたデジタル式多目的メディア教室に改修することにし、その計画を本学学務課と検討して、綿密な数ヶ年計画を立案した。

法人化という大きな流れの中で、まず H205 教室（LL 大）の予算が計上され、新型 PC と PC@LL（内田洋行製 CALL）の導入が可能となった（平成 18 年度後期）。当時は、名古屋近辺で PC@LL の良さを理解している大学は少なく、大半が CaLabo（現チエル製 CALL）であったが、本報告者は名古屋大学で計画されていた LL 改修に対する意見を強く表明して、結果、名古屋大学教養教育院の CALL 4 室も PC@LL を導入したため、本学の CALL サーバーに教材として保存しているものが、教員間相互交流の盛んな名古屋大学でも容易に使用できるようになった（もちろん逆も可）。また、もう一方の H204 教室（LL 大）についても、学内の「魅力あふれる大学づくり関連事業」として 2 ヶ年度にわたり予算計上され、平成 21 年度末には H205 教室同様に PC@LL を導入した CALL 教室に生まれ変わる。この間、平成 20 年度末には G204 教室（LL 小）に新型 PC と簡易型 CALL“Wingnet”（コンピュータウィング社製）が設置されたが、これにも（本部門設置直前とはいえ）建設的な関与を行ない、本学の視聴覚教育用施設の整備計画に貢献している。G204 に導入した簡易型 CALL“Wingnet”については、平成 21 年 5 月 13 日（水）に本学教員を対象とする説明会を開催した。

2. ICT 活用のためのワークショップ――関連学会との連携

平成 21 年 4 月から国際関係学科に着任したエドガー・ポープ准教授は本部門を構成する有力な研究所員である。本報告者は平成 20 年度から大学英語教育学会（JACET）の ICT 特別調査委員会の中部支部代表委員であったが、ポープ氏は『2007 年度 ICT 授業実践報告書』に On Demand Lecture Program という報告を寄稿していることを知っていたため、氏と協議のうえ、JACET 中部支部第 26 回大会（名古屋外国語大学）において、ワークショップ（表題 An

On-Demand Lecture Class on U.S. Culture using Moodle and Ub!Point)を共同企画・実施し、好評を博した。

当該ワークショップの内容は、多様なアメリカ文化の講義に Moodle を使って作成した動画を含むオリジナル教材を活用するというものであったが、これは本学の特別講義のような授業に活かすことができる。例えば、本学で開講している多様な講師陣による「英語連続セミナー」なども、これまでに蓄積されている授業のビデオ録画を活用して、本格的な自律型学習教材を 1 セット 15 回シリーズとして作成すれば、一過性に陥りがちな多様性に富んだ質の高い講義を再利用することが可能となる。

3. CALL 教室を利用した学生自主学習のススメ――語学試験対策としての H205 教室の運営

平成 21 年度 11 月からは、腹案として温めていた「語学試験(TOEFL/TOEIC/IELTS)受験のための学生自主学習」を次のような要領で実施に移した。

(1) 場所:H205(CALL)教室。
(2) 目的:CALL を利用した語学試験(TOEFL/TOEIC/IELTS)受験のために学生が自主的に学習することを支援する。
(3) 日時:毎週水曜日午後 1 時から午後 4 時まで。
(4) 当該時間帯の運営のため TA(名古屋大学大学院生)が常駐する。
(5) 使用できる 3 種類の複数教材(これらの教材をそのまま持ち帰ることは不許可)
  a)TOEFL テスト完全攻略模試(6セット)
  b)TOEIC テスト新・最強トリプル模試(7 セット)/重点強化式新 TOEIC Test リスニング問題集/TOEIC テストリスニング徹底攻略/新 TOEIC TEST 実戦パーフェクト模試(各 1 セット)
  c)IELTS 試験対策 Cambridge IELTS 6 Self-study Pack(4セット)

4. 本学学生のニーズに適合した視聴覚教材の開発――音声学実験実習室との連携

本学部が管轄する「音声学実験実習室」では“スピーチ・クリニック”を開設して、外国語(特に英語)の発音の不得意な学生や Native Speaker の自然な発音に近づきたい学生を対象とする発音矯正を課程外教育として実施している。ここでは、無料音声分析ソフト WaveSurfer を利用して、学習者が自律的に英語音声リズムを習得できるソフト「自然な英語リズム完全マスターPart I」(80 unit / 80 sentences)を平成 19 年度には完成し、それを「視聴覚自習室」で使用できるように CD-ROM 化した。平成 21 年度には同シリーズの Part II を作成中である。この自律型学習教材は、視覚認知情報を音声波形に附加して、臨界期を過ぎた大人の学習者の音声認識のサポートを行なう点に特徴がある。これは、PC@LL 等の CALL の speaking 機能とも合致するため、将来的には、通常の外国語科目の英語の授業の初めの 15 分程度を割けば誰でも容易に発話練習が行なえるように、その操作の単純化も含めて、汎用化していくことが必要である。

5. 今後の重点的課題

CALL ソフトの開発業者主体ではなく、本部門が中心となって、本学で実際に展開が可能な CALL 利用のモデル授業を定期的に紹介することが求められる。FD の一環としてこれが成功すれば、CALL 教室利用率のいっそうの向上へとつながり、その真価が理解されることであろう。